

## ■ 1) 情報交換 4 点 (仙台市)

### ▼「こどものまち」をやろうとしたきっかけ、動機

1995 年の「仙台市子どもセンター」構想（基本理念：“子どもが生き生きと暮らす力を育むことを支援し、子どもの権利の具現化を推し進める”）の下で、子どもが主体の遊び＝学びの場としての事業展開が企画され、1997 年に事業を企画実施する子ども未来フォーラム実行委員会（委員長大村虔一）が立ち上がる。当初はワークショップ等による遊び場づくりが主体であったが、2002 年にミニ・ミュンヘンを模した「こどものまち」の企画提案が出され、バラバラになりがちな実行委員の共通の事業として継続的に取り組むこととなる。

（「ミニ・ミュンヘン」の情報については、子どもセンター構想当時の委員会でも紹介をされ、プログラムの一つとして検討されてきた経緯がある）

### ▼準備から参画している子どもたち

未来フォーラム実行委員会の委員として高校生自主事業の高校生メンバーが参画していた時期もあったが、現在は「こどものまち」のOBとして中学生メンバーが当日のスタッフとなって働いてもらっている。準備段階からの子どもの参画のあり方については、今後の課題である。

### ▼子どもたちを、どう集めるかへの工夫、悩み

子ども未来フォーラムは仙台市との共催事業として位置づけられてきた。また、会場の都合から定員制（150名/日）をとって市内の小学生に募集をかけ、毎年抽選（最初は倍率 10 倍。現在は 2 倍程度）で参加をいただいている。初めは仙台市の協力で全小学校にチラシを配布したが、あまりの応募の多さに市政日より等広報先を限定するなどしてきた。今後は、実行委員会が独自のNPO団体（市からの負担金ゼロ）になったことで、仙台市の協力は期待できなくなり、広報のあり方が課題となっている。

### ▼より主体的に参画してもらうための工夫、悩み

応募であることから、当選者に事前の案内（こどものまちへの入国パスポート）を送付し、まちの仕組みや約束事、どんなことができるかなど、10 数ページの手帳サイズのパスポート（本物仕様？）を届けることで、参加するこどもたちのワクワク感を高めている。まちに関わる大人のスタッフ（7割が学生）は先住民＝ボラ族として位置づけられ、事前の説明会と準備会を2～3回開催し、「こどもが主体のまち」であり、こどもたちが自分で考え行動することを尊重し支援することを基本に関わることとしている。参加するこどもにとっては“1日だけのまち”という制約から、仕事に追われてしまったり、あるいは、まちの仕組みを楽しみ自分たちで創り上げたりなどの工夫になかなか至らないなどの課題もあるが、むしろ、1日を朝から夕方まで親から離れて自分の好きなように目いっぱい遊ぶことのできる「こどものまち」、ということで貴重な遊びの場になっていると考える。